

フィリピン研修 参加報告書

京都大学文学部 2回 飯田智絵

私は、フィリピンと日本の両方にルーツを持つ JFC (Japanese-Filipino Children) の子どもたちと学習支援ボランティアを通じて出会った。このボランティアを通じて生徒たちのルーツの国であるフィリピンという国に興味を持った。また同時に授業で日本にいる外国人の現状やそこに潜む問題・多文化について学ぶうちに日本に移民が比較的多く労働力輸出国であるフィリピンに行ってみたいと思いが募り、今回の研修への参加を決めた。

今回研修に参加した目的は2つあった。多文化社会・多文化教育・移民問題などこれから日本で大きくなる可能性のある問題について多様な視点から考えるあしがかりを得ること、また JFC の子どもたちのルーツの国であるフィリピンについて、その文化やそこに住む人々の生活を生で体感し、彼らのバックグラウンドとなっているものを感じ取ることであった。

私は今回が初めてのアジア渡航であったが、クラクションの鳴り響く騒々しい混んだ道路、人の気配や生活が感じられる町の雰囲気、どれも新鮮であった。夜でも煌々と明るい巨大ショッピングモールや色とりどりに光る看板の安っぽいネオンがある一方、あちこちで工事が行われ車などの排気だけむった空を見て、活気にあふれ今まさに発展しようとしている国なのだと感じた。この地に住む人々が日本を含め世界に飛び立ち、JFC の子どもたちの中にも息づいていると思うと感慨深いものがあった。

今回は CFO (フィリピン政府在外フィリピン人委員会) や学校などを見学した。その中でフィリピンの海外で通用する英語力、明るくホスピタリティ溢れる国民性、海外移住者・渡航者に対する支援を行う CFO の存在やその活動を自分自身の目で見て体感できた。フィリピンがいかんして海外に労働力を輸出してこられたか、そこには国家として海外への渡航を支援する CFO がなくてはならない存在であったと感じた。

また、現地でエンターテイナーのプロモーターをしていた方から日本の外国人技能実習制度のお話を伺った。外国人技能実習制度は存在するものの、いまだ規制は厳しく十分な整備がなされていないということであった。また CFO で開かれたセミナーでは日本に渡航し生活する予定の女性たちに話を聞く機会があった。日本で生活するにあたって最も不安なことについて尋ねると言語の壁だと答える女性が圧倒的に多かった。確かに、町でも英語表記が増え外国人への対応が進められているとはいえ、英語を流暢に話せる人は少なく日本で働き暮らしていくには日本語が話せることが必要不可欠であるという現状がある。日本ではグローバル化が叫ばれているもののまだ実態が伴わず、海外からの移住者を受け入れるには態勢が圧倒的に不十分であると感じた。

労働力輸出国であるフィリピンと労働力の受け入れ国となるであろう日本を対比して、両国間に多文化・グローバル化への対応の度合いについて制度面・生活面の双方で大きな差があることを実感した。それと同時に、少子高齢化がすすみ労働力不足は避けられない問題となっている日本で近い将来海外からの労働力を受け入れざるを得なくなるであろうにもかかわらず、その対策はあまりに進んでいないのではないかと危機感を抱いた。

最後に、今回の研修ではフィリピンについて様々なことを身をもって体感し学んだが、それに加えて院生や先生を交えての深い議論を聞く機会が多く良い刺激を受けた。自分の知識量や考えをうまくまとめて言葉にする力、考察力の不足を痛感すると同時に学習に対するモチベーションも高まった。これらを含め、今回のフィリピン研修を通じて得たものは自分のこれからの成長につなげていきたい。